

塔本シスコさんって どんな人？



キャンバスを前に笑顔を見せる塔本シスコさん

型にはまらずありのままに
自分らしく描き続けた人生

昨年、彼女が描いた絵が巡回展として全国4カ所の美術館で展示されました。独学ながら、美術家からも評価されるシスコさんの絵。作品を描く対象は段ボールやガラス瓶などさまざま。その自由で生き生きとした絵は、見る人を元気にしてくれます。

大正2年に八代市で生まれたシスコさんは、生後ほどなく松橋町東松崎の家庭に引き取られ、養女として育ちます。

シスコという名は、養父がアメリカのサンフランシスコに移住したいという若い頃の夢を託して名付けました。

小4の時、家業が傾き豊川尋常高等小（現在の豊川小）を中退。奉公を重ねたのち20歳で結婚しましたが、46歳の時に夫が事故で他界。自身も心身の不振に陥り、48歳の時に軽い脳出血で倒れてしまいます。リハビリを兼ねて石を彫り始めると、徐々に子どもの頃から「絵を

描きたい」という欲求が大きくなりました。
53歳の時に、画家の長男が自宅に残したキャンバスから絵の具を削ぎ落として油絵を描き始め、以来、平成17年に亡くなるまで絵に没頭。
作品の中には、幼い日に見た宇城市の風景画が描かれたものも多数あります。



着物に自分で絵を描いて祭りに出掛けるファンキーな一面も



創作中の真剣な様子

シスコさんと私

シスコさんの絵
でよみがえった
底井樋祭り



元 東松崎区長
ひろみつ
斎藤弘光さん(69)

かつて干潟の干拓地だった松橋町東松崎。ここで開かれていたのが、農業用の真水を引くために海底を通して作られた水路・底井樋の完成を祝う底井樋祭り。祭りは、戦前まで行われていたもののいつしか途絶えてしまいました。

平成15年に当時の区長から祭りを復活させようと提案がありましたが、写真も残っておらず、由来を語るのは大野川河川公園に残る石碑だけ。そんなとき、偶然シスコさんの作品に出会いました。当時の祭りを知る人がいない中、この絵は貴重な手掛かりとなり、底井樋祭りは本来の姿を取り戻すことができました。



1



2

1 東松崎公民館にある底井樋祭りの絵のレプリカ
2 絵を元によみがえった底井樋祭り

シスコさんの
絵の魅力

熊本市現代美術館 学芸員
あきこ
坂本顕子さん(47)



シスコさんの作品は、画面からあふれ出すような明るい色彩や、自由で大胆な構図が特徴的。何と言っても「描かずにはいられない」と、空瓶子やそうめんの箱に至るまで縦横無尽に描きまくる、^{おきて}掟破りの面白さやエネルギーが最大の魅力だと感じています。

昨年当館で開催した企画展の作品調査で一番の収穫だったのは、シスコさんの描くふるさとの風景は空想の産物ではなく、具体的な記憶に基づいていたこと。宇城の町を巡ると、^{えいたいきょう}永代橋や底井樋、馬入れ川やフミ上げ漁、十五夜綱引きなど、作品の風景の片鱗がそこかしこに残っていました。80歳近くになって、一つ一つ思い出すように当時の様子を描き込んでいったキャンバスを見つめていると、「どがね、私のふるさととは良かところでしょうが」というシスコさんの声が聞こえてくるようでした。

孫から見た
シスコ

塔本シスコさんの孫
みあ
福迫弥麻さん(49)



子どもの頃、孫の私から見たシスコの印象はサービス精神旺盛でお茶目なおばあちゃん。お祭りが好きで歌が好き。

大阪の展覧会では「おてもやん」や「田原坂」など熊本の歌を歌い、会場を盛り上げていました。アーティストが^{さんしん}三線や弦楽器のバンジョーなどを持ってきて、シスコの歌に合わせて伴奏してくれることも。大阪は面白い人が好かれる土地柄なので、「面白いおばあちゃん」という感じで、皆さん温かい目で見守ってくださいました。

絵を描くときは、黙々と集中しているときもあれば、疲れたら自分を励ますために歌を歌い、リズムに合わせて筆を運んだりしていました。絵が出来上がってくると「これはね、ここはね」と絵の説明をしてくれるのですが、それが絵本の中のお話のようで楽しかったことを覚えています。